

世田谷・九条の会

世田谷・九条の会
ニュース No.55

2019年11月30日発行
(題字 西山簡石)

●事務局 〒154-0017 世田谷区世田谷 1-11-16 世田谷民商気付
Tel:03-6413-9547 Fax:03-6413-9548 Mail: setagaya9jou@kzh.biglobe.ne.jp
●ホームページ <http://www7a.biglobe.ne.jp/~setgagaya-9jou>
●郵便振替口座 記番号 00110-5-260741 世田谷・九条の会

核兵器は必要悪ではなく絶対悪です

上田 定男

終末時計は、第二次世界大戦中に核兵器の研究・開発にあたったアメリカの科学者たちによって、『原子力科学者会報』(Bulletin of the Atomic Scientists)の表紙絵として誕生した。

この時計は、核戦争の危機がどれくらい迫っているかを、分針が午前0時の何分前をさしているかで示している。その終末までの残り時間を「0時まであと何分」という形で象徴的に示している。人類を破滅させる人類滅亡の危険性が高まれば、分針は進められ、逆に危険性が下がれば分針が戻されることもある。1989年10月号からは、核兵器からの脅威だけでなく、気候変動による環境破壊や生命科学の負の側面による脅威なども考慮して、針の動きが決定されている。

1947(昭和22)年の創刊の時には、針は「7分前」を指していた。それが、旧ソ連が原爆を開発した1949年には、針は一気に「3分前」までになり、その後、米ソ両国が水爆の開発にしのぎをけずっていた1953年には、針はとうとう「2分前」まで迫った。行きつ戻りつした終末時計の針も、現在は、トランプ大統領のINFからの離脱や北朝鮮の核開発による脅威が高まった現在(2018年)で、「終末2分前」を指している。

2017年7月7日核兵器禁止条約が締結された。この条約は、既に79カ国が調印し、33カ国が批准した。50カ国以上に批准国になると発効する。この条約は核兵器に「悪の烙印」を押し、核兵器を非合法化する。法的に禁止されたことをやり続ける国は、「ならず者国家」になる。

人間は「他者を支配するために核兵器を作り出した。しかし、実際には自分たちが核兵器に支配されてしまいました」(ワイン ICAN 事務局長の2017年ノーベル平和賞の受賞講演)。それを転換

する時代がすぐそこまでやって来ている。カナダ在住の被爆者、サーロー節子さんもノーベル賞の受賞講演で、「核兵器は必要悪ではなく、絶対悪」と訴えた。そして、彼女は、被爆直後に瓦礫の下で聞いたという「諦めるな。踏ん張れ。光が見えるだろう？そこに向かってはって行け」という言葉で講演を締めくくっている。

世界終末時計。2019年現在は「2分前」となっている。

被爆国日本の核兵器の完全廃絶に果たすべき役割はますます大きくなっている。私もその光に向かって、諦めずに草の根からの闘いの一翼を担って「ヒバクシャ国際署名」を広げ、安倍政権退陣を果たしていきたい。

(世田谷区労連議長)



永田浩三さんが講演

～世田谷・九条の会 14周年のつどい～

世田谷・九条の会は11月9日、成城ホール会議室で、14周年のつどいを開催。永田浩三さん（武蔵大学教授、元NHKディレクター、プロデューサー）に講演していただきました。演題は「安倍政権とメディア～忖度・不自由・嫌韓でほんとうにいいの？」で、「マスメディアとわたしたち」がテーマ。参加者95人でした。



永田さんはA4で4枚のレジュメを準備され、映像を使って講演されました。

新天皇即位と台風と官邸、第4次安倍再改造内閣 異様な改憲シフト、安倍政権の旗振り役としてのNHKニュース、1993年以降 安倍晋三氏の因縁の物語、メディアはどう闘うのか、韓国のドキュメンタリー「共犯者たち」、あいちトリエンナーレの表現の不自由展。以上の章立てでこの間のメディアの諸問題を丁寧に分析されました。

その一部を紹介しますと、「アメリカは問題のある国ではありますが、唯一良いところは、このベトナム戦争の汚い部分についても全部記録を残していたということです。だから暴かれたんですね。今の安倍政権は記録を残さない。あるいは記録を改ざんする。これは歴史の検証を避ける非常にいくじのない政権だと思います。将来に禍根を残すことになるのは間違いありません」「韓国で『共犯者たち』という映画がヒットしました。共犯者はメディアです。大統領たちがメディアにチョッカイを出して、番組をつぶしたり、放送局のトップを都合のいい人に替えたりする。そんな中で韓国のMBCの番組を作っていたディレクターがこの映画を作った。彼は言っている。歴史を畏れなさい。記者が質問をや

めれば、社会や国が壊れる。記者は国民の知る権利に奉仕し、メディアと市民が一緒になって健全な民主主義をつくっていくのだ、と」。

永田さんの講演に対して、NHK 受信料問題、番組への声、嫌韓の空気、徴用工問題では人権侵害の実態が問題ではないか、などの質問が出されました。永田さんは、番組への電話、FAX、メールでの意見はものすごく大事だと答えました。

【アンケートから】

●いつでも、力のない者や弱い者が、つらい思いをする世の中で、大切なこと、避けては通れないこと（真実）から、目をそらせずに、小さな力でも、みんなが集まり声をあげていくことがとても大切だと感じました。永田さんのお話は、物静かに、淡々と、核心に触れる大事な深部のお話で、またとてもわかりやすかったです。少女像（うわさの）がお家に居た・・・とお聞きしましてすごく驚きましたし、すばらしいことだと思いました。



●優しい語り口で、メディアの問題点、大切さを話された。とても面白かった。NHKには、苦情や励ましが有効なことが分かった。面倒がらずに出そう。

●素晴らしい講演でした。眠くなつてはいけないと最後部の席におりましたが、いやいやおもしろく、わかりやすく、深く様々な分野に及ぶお話を聞かせて頂き、感謝いたします。

●おかしい事は長つづきしない！その言葉に勇気をいただきました。

●映像を見ながら、今メディアでおこっていることがとてもよく理解できた。おかしいと思うことを発信することが大事なのだと思った。マスコミがダメだから、と言ってしまうのは簡単だが、マスコミにもっと真実をきちっと伝えてもらえるものになってもらえるために、どうしたらいいのか考えたい。勇気と気概をもって頑張っている記者や関係者もたくさんいると思うので、そういった人たちを目に見えるように応援したいと思った。よい機会を作っていただいてありがとうございます。

2019 年第 4 回交流会

今回の交流会は、日程の都合から日曜日（11/24）に設定せざるを得なかったためか、世田谷、桜丘、成城・祖師谷、まつざわと弦巻・新町（重複）の 5 つの九条の会からの 8 人での開催となった。世田谷・九条の会事務局から前回（8/24）以降の活動経過と国際・国内情勢について時系列資料を簡単に報告した後、情勢全般について自由討議した。

話題のひとつは来年の都知事選。争点としてあげられることは何か？議論を急ぐ必要があるとの提起があった。米軍横田基地の機能・演習の強化と横田ラプコンを容認している結果、増便される羽田を離発着する航空機のルートが都心上空を急上昇、急降下することの安全性の問題、騒音被害はひとつの争点になろう。豊洲市場移転での小池知事の公約違反、有害物質検出について最近では報道が減ったが、安全性の問題は残っているのではとの意見があった。この夏岩手、埼玉県知事選で野党が一本化した候補が勝利し、敗北したところでも、首長選挙では与野党が拮抗するまでになっている。参院選に先だって、立憲野党と市民連合が合意した 13 項目の政策をもとに働きかけを強めていきたい。

続いて、各 9 条の会から、主にこの 3 ヶ月間に取組まれた行動の報告があった。この期は、日韓問題で学習を深めた事例が特徴的だった。

○ 弦巻・新町

11 月 23 日に渋谷共同法律事務所の淵脇みどり弁護士を招いて「安倍 9 条改憲の自衛隊明記をどう考えるか」と題するつどいを開いた。久しぶりの例会で 10 人が参加した。参加者が固定気味なので、できるだけ新しい人が参加できるよう宣伝していく必要性を感じた。



○ まつざわ

9 月 8 日に一橋大学の加藤圭木さんをお迎えして、日韓問題の学習会を開催した。1910 年のいわゆる「日韓併合」は、多くの日本人が歴史の授業で聞いているが、その実体は、日本による軍事的で強権的な朝鮮の植民地支配の集大成にほかならなかった。意見交換の中でもそうした実体を初めて知ったと感想が出たように、両国間の問題は明治以前からの歴史を改めて学び直し、植民地化された側の痛みを理解しなければ、安倍内閣の韓国バッシングのような偏見を克服できないのではないかと感じた。会報 No.25 を発行した。

○ 桜丘

11/9 から 11/10 までの 2 日間、桜丘区民センター祭りで、日韓問題を取り上げて展示を行った。パネルはわかりやすく見ってもらえるよう、表情豊かなネコの写真を入れるなど工夫した。論点は、①日韓問題の発生要因は、明治以降の日本による専制支配だった、②日韓条約（1965）は国と国との間での請求権放棄、③被害者個人の民間賠償請求は残っている、の 3 点。徴用工問題ではすでに和解例がある。今後の被害者救済を両国民で考えて行こうとまとめた。戦争の話をしてくれた人、長い討論になった人がいた。

○ 成城・祖師谷

毎月定例のピースパレードを、少数でも街中で直接訴えたいと続けている。8 月以前になるが、6 月には古川健三弁護士の「平和憲法の破壊を許さない」と題する講演会を開催した。

来年の2月には小森陽一さんを招いて、一方通行の講演ではない討論会という新しい形での学習会を予定している。

○ 世田谷

11月9日に、ジャーナリストの永田浩三さんを招いて14周年のつどいを開いた。95名の参加とほぼ会場はいっぱいだった。パワーポイントを使って、学者・研究者とはひと味違った観点から、安倍政治の問題点、メディアの果たすべき役割を縦横に解明するものだった。詳しくは本ニュース別記事参照。

○ 代田（当日欠席）

11月4日に森孝博弁護士を招いて、「安倍改憲の危険性と改憲をめぐる動向」と題し、講演会を開いた。今の自衛隊は、米軍と頻りに共同訓練を重ね、装備も増強されており、憲法に明記されることで戦争に関わる可能性が大きい。「何も変わらない」は全くの嘘。隊員の自殺者が多いことも問題。災害に対処する法律はすでに整備されている。

○ 烏山（当日欠席）

10月5日に東大名誉教授の和田春樹さんの講演会をもった。北朝鮮の拉致問題、とくに5人の拉致被害者の「帰国」の陰にあった事情と、安倍首相（当時は幹事長）の果たした役割について、直接交渉に関わった立場からの話が披露された。

最後に世田谷・九条の会事務局から、12月6～9日の区内一斉宣伝行動と2月14日、3月14日の戦争させない！九条こわすな！世田谷連絡会の学習会及び区民集会&パレードの行動提起があった。

野菜について（1）

稲葉 敏雄

前回、「種子法」が葬り去られた経緯を書きました。その延長線上で、今回は農作物の遺伝子組み換えや遺伝子編集の仕組み・危険性について、さらにTPPについても書くつもりでした。しかし、書き出してみたら“作物”についてももう少し知ってもらいたいという思いが膨らんできて、今回は方向転換して“野菜”についてのオムニバスを、思いつくままに書かせていただきました。

<野菜は地産地消で？>

私は大学の講義で、学校給食で“地産地消”の取り組みが各地で進んでいることを紹介し、教師志望の学生達とその是非について議論をしています。

驚いたことに、「地産地消」という言葉自体を知らない学生は、毎年半数近くはいます。学生達は言います。

「地元で採れたものを、地元で消費することですよね。学校給食に是非取り入れたいですね」
「私の中学校は、給食は自校方式でした。今でも作ってくださった調理師の方々の顔が、感謝とともに浮かんできます。地元の方が作ってくださった野菜はいいですよ」



ほぼ全員が同意の笑顔を見せる。そこで、私はいつも極端な議論を振ってみる。

「その野菜が農薬たっぷり育てられていても？」

「エッ!？」

「化学肥料どっぷりでも？」

「エッ?、エッ!」

「100km離れた畑でつくられた無農薬・有機栽培

でじっくり育てられた野菜と学校の隣の畑で促成された農薬も化学肥料もたっぷりの野菜と、本来どちらを子ども達に提供したいか」

学生達はすぐに「どこで採れたか」よりも「どのようにして育てたか」の方が、子ども達にとっては遙かに重要であることに、すぐに気がつく。

地域の経済的活性化を中心タームとした“地産地消”を、そのまま学校給食に持ち込むことには無理があると、即座に理解する。

「“地産地消”は地域経済の論理で、教育の論理＝食の安全と安心とは本来馴染まない。“栄養満点・おいしさ満点”という栄養学の立場とは、もっとかけ離れている。子ども達にはどこで採れたかよりも、安全と安心、栄養満点・おいしさ満点ではないのか」

<何を食べたいか>

森林や草原で、虫に食い尽くされてしまったり、菌類に冒されて見るも無惨な姿になった植物たちを、皆さんは見たことがありますか。森林や草原でも、もちろん虫もいますし、病原菌もいます。でも、彼らに徹底的に痛めつけられ、再起不能となった植物たちは時間軸を短く取ると、有史以来、ほとんど皆無なのです。

しかし、畑は違います。農薬を散布しないと虫食いだらけになったり、病気にかかったりして、全滅の危険があります。それはなぜなのでしょう。

私は5年前に、茨城県笠間市にほんの少しの畑を借りて、無農薬・有機栽培の農業のまねごとを始めました。畑の前任者は「有機肥料たっぷりの良い畑ですよ」と自慢していました。

一年目：有機肥料をたっぷり施して夏野菜を植え付けると、たちまち虫たちが寄ってきて葉は穴だらけでレースの編み物のようになり、毎週行く度に、虫取りに追われました。もちろん虫の攻勢には追いつかず、かなりの作物は収穫不能でした。畝と畝の通路には、畝から刈り取った草を敷いたのですが、その枯れ草をめくると、毎週のように幼虫が洗面器一杯捕れました。

冬野菜も同じでした。「無農薬は無理だ」と苦悩した一年でした。

二年目：懲りずに無農薬・有機栽培を続けました。虫との格闘は続きましたが、雑草をそのままにし、肥料も抑え気味にしたところ、クモやカマキリ、テントウムシやカエルなどの天敵が増え、病気も少なくなってきました。収穫が期待できたのです。

三年目：有機肥料を元肥として与えるのを極端に少なくしました。土の中の微生物にも着目し、多様な微生物が存在できるように土の耕起をやめました。害虫の心配はほとんどなくなり、病気もキュウリに起こるうどんこ病くらいになってきました。

四年目：肥料はほとんどやらなくなりました。雑草を刈り取って乾燥させてから畑に埋め込む位しか手を入れなくなりました。病気はほとんど出なくなりました。害虫も「彼らが食したおこぼれを私達がいただいている」との冗談も出るほどになりました。もちろん収量も安定しました。

五年目：畑で取れた種子を蒔き続けたこともあるでしょうが、夏野菜の寿命がぐんと伸びました。トマトは10月中旬まで、ナスは11月初旬まで実を結びました。野菜達はそれぞれの味を主張しています。相変わらずモンシロチョウは飛び交い、テントウムシだましはいますが、もう私たちが相手にするほどのことはなくなりました。

お裾分けしたご近所さんから「稲葉さんは、こんな野菜を食べているの」と羨ましがられたり、「トマトの味を思い出したよ」と言ってくれるようになりました。

ビックリしたことに、三年目以降に採れた作物は、収穫後、いくら長い間常温で置いても腐らないのです。水分だけが抜けてミイラ化し、枯れていくのです。まるで入滅した高僧や森の中で朽ち果てていく植物みたいに。

一年目に収穫したレタスを知人にお裾分けしたときに「冷蔵庫に入れなかったら、三日でカビが生えて、トロトロしてきた。有機栽培はすごいね」と言われ、その時は「そうでしょう！」と胸を張っていました。何という無知。

腐ると言うことは、空気中の微生物が取り憑いて起こる現象です。彼らが大好きなのは、過剰に与えられた肥料からつくり出される“硝酸態窒素”を主とした物質です。硝酸態窒素は、化学肥料であろうと有機肥料であろうと、過剰に与えられれば必ずそれに比例して生産され、作物に吸収されて、野菜は必ずメタボになり、害虫を呼び寄せ、悪さをする微生物を引き寄せるのです。だから腐ったレタスは、肥料過多で育ったメタボのレタスだったのです。一年目の“にわか百姓”はそんなことも知りませんでした。

私はその時初めて、化学肥料であろうと有機肥料であろうと過剰に散布して育てた野菜は、人間が食するに値しないのだと気がつきました。

皆さんは、例えば安売りの白菜から“苦みやえぐみ”を感じた経験はありませんか。あれが“硝酸態窒素”の正体です。

(東京都市大学非常勤講師)

楽しかったコスタリカの東方見聞録（その3）

井出 今朝二

4日目の午前中は「再生可能エネルギー」について学習ため、ICE（国営電力会社）を訪問する。ICEは1949年に全国民に電力を供給するために設立されたもので、水力・地熱・風力・太陽光・バイオマス・廃油の火力発電をしており、電力を7社に売って生産に要する料金をもらっている。使用量の多い家は割増料金になっているのは面白い。中南米に数千か所発電所があり、メキシコ～パナマまで230kVの送電線で繋がっている。電圧は各国ともに共通だから貸し借りができるようだ。ここを訪問する団体は初めてだと大いに歓迎され、スタッフと一緒に記念写真を撮ってもらう。なお首都のサン・ホセは景観美化のため電線は地下に埋設されているのには驚いた。



次に SINAC と呼ばれる 1998 年に発足した機関を訪問。80%が環境省の仕事を担っていて、様々な団体も SINAC の中にあるそうだ。国立公園 28、自然保護区が 140 あり、国土の 26%が保護区に指定されている。国立公園や森、動物を守り公園作るにも SINAC の許可が必要。市町村独自で決定できず 7 つある県の代表者も交えて会議で決める。森林を守るためにボランティアも使い、運営費の 92.2%が環境税、飛行機の離発着料や家を作るため木を切ると払う税金で賄っている。自然保護区の収入の 60%は、年間 200 万人訪れる観光客の払う入場料。観光客は主に 8 か所に集中するため、他の地域への分散が課題である。チリボ火山は入山制限があるが努力と工夫により入場者数は増えている。SINAC は市民の意見を中心に取り入れて活動する組織である。

自然豊かな国でエコツーリズムの発祥の地として知られるコスタリカだが、1950 年代以降コーヒー・バナナ・牧畜などの農業振興などにより国内の森林伐採が激しく、自然林は 80%から 30%以下まで激減してしまったそうだ。これではいけないと 1970 年代に入り実効的な自然環境保全政策がとられるようになり、国民の努力と協力で少しずつ人工林の緑を増やして現在に至っている。

午後はサン・ホセ市内見学。国立博物館は陸軍司令部のあった要塞をそのまま使っているの
で、左右の塔には 1948 年以前の戦いを示す生々しい銃弾の痕が多数見られ、当時使用されてい
た大砲や武器、コロンブスが訪れる以前の彩色された壺や様々な土器、土偶が展示されていた。
中庭には大きな石球が展示されているけど、何のために、どのように作ったのかはわからない
そうだ。コスタリカの文化歴史は北部のマヤ・アステカ文明、南部のインカ文明の交流点だと
言われている。 (前「生かそう憲法！今こそ9条を！世田谷の会」事務局長)



世田谷区の教育現場の実態について

榎 良治

私たち都教組世田谷支部では、長年に渡って教職員の長時間過密労働の実態を明らかにし解消を訴えてきました。マスコミにも訴えていく中で、その実態が世間に知れ渡るようになりました。朝早くから夜遅くまでのあまりにもブラックな働き方や国や都、区からの管理強化、トップダウンによる一方的な仕事の押しつけのために、定年を待たずに早期に辞めていくベテラン教員が後を絶ちませんでした。大量の退職者を生み出すことによって学校現場の混乱に繋がりました。また、同時に、若者の教員への希望が減少することにも繋がったのです。

8月5日の朝日新聞で、「公立小中 教員不足 1241 件」「代役の非正規見つからず」との見出しがありました。朝日新聞の5月1日の調査によると全国の学校で、1241 件の未配置があったということで、少人数学級や特別支援学級の担当、病休や産育休の代替の教員が見つからないということです。必死に探しても穴埋めできないことが全国で起きています。

東京都でも同様で、近年、教員志望の減少が起きていて、2018 年度の東京都の小学校の採用倍率は 1.8 倍でした。昨年度、世田谷区では、4 月の始業式に、担任不在の学級が多数あり、急遽、少人数授業担当の教師が担任を勤めたり、再任用の教師や副校長が担任になるということが起こりました。前代未聞です。新規採用教員や期限付き教員、登録してある教

員は底をつき、70歳になる元教員にも声がかかったということです。

5月になっても、10名を超える学級がまだ見つからない事態でした。全都では、当初数百人に及んだということも聞いています。今年は、多くの新人を確保したことにより、学級の担任不在ということは聞いていませんが、その分、教員としての能力の差が広がったことは否めません。



世田谷区では、教員のブラックな働き方の実態が明らかになってくると、教員の忙しきの解消を目指して、「教員が子どもと向き合う時間の拡充」をテーマに掲げました。しかし、仕事を減らすのではなく、学校にパソコンを導入することによって、仕事の効率化を狙い、労働時間短縮を考えました。区側としては、少しでも子どもたちと向き合えるようにさせたいと「世田谷区教育ビジョン」において打ち出しましたが、実情は、授業が

始まるとパソコンに向かってばかりもいられず、休憩時間を使った一度の研修会で覚えられるはずもなく、導入された職場は、覚えるのに疲れ切りました。しかし、やっと覚えたソフトが、昨年新たな物と入れ替わり、またもや区内全体に大混乱が起きました。前回よりも使いづらいソフトの導入によって、仕事の効率化どころではなく、区内が一斉に使うことによって、サーバーが対応できずにパソコンが動かなくなったことや週案や時数、高校への抄本の処理など前年度できたことができずに、学期末の成績処理に莫大な時間の浪費と徒労感、疲労を持ち込みました。このようなことが新たな負担になって、忙しさに拍車をかけてきたのです。

世田谷区教育委員会が、教育ビジョンで打ち出した「教員が子どもと向き合う時間の拡充」は、もちろん重要なことですが、日々子どもたちと接している教員としては、もっと授業の準備をする時間が欲しいというのが、本音です。会議や研究会、それぞれが分担している学校全体の仕事、研修会、学年会などを終えて、夜遅くなって最後の最後になって明日の準備をする毎日です。保育や介護等で早めに帰宅しなければならない教員にとっては、夜中か朝早くの持ち帰り仕事です。今、私たちが欲しているのは、「教師が教材に向き合う時間の確保」です。一方的に仕事が上から降ってきて、明日の準備をする時間がないのが現実です。一つ一つのことを取り上げられれば、価値のあることでも、全部が今、学校に束になって下りてきています。誰も止めることはできず増える一方です。道徳や英語が教科になり、その評価や準備もこれまで以上にかかります。来年のオリンピック、パラリンピックのために、授業時間の中にオリパラを位置づけさせなさいと指導が入ります。学習指導要領

が変わり、プログラム教育も入ることになります。これ以上仕事は、入れられません。仕事を増やさずに、目の前の子どもたちのことをじっくりと考える時間を確保したいのです。

今、学校では、職員会議がない職場もあります。校長の権限強化によって、加えて、主幹制度の導入によって、ピラミッド型の組織ができあがってきています。これは、従来の学校の仕組みを大きく変えました。考えないで、言われたことをやれる教員であればいいのです。指示されたことをきちんとやれば十分です。授業も、やり方が統一されてきています。黒板の書き方も授業の流し方も、それぞれの個性が失われつつあります。

言わば、スタンダードと言われるような画一的な教育が現場にも浸透してきているのです。若い教員の増加によって、学校での対応力が弱くなってきています。保護者や社会の要請は強まる一方で、対応に追われる日々が続いています。

夕方になると保護者からの電話がなり、個別により丁寧に対応しなければなりません。少しの怪我でも、家庭連絡を行い、管理職に連絡するのです。「バンドエイド程度なら連絡しないでいいです」と保護者から言われたという話を聞いたことがあります。休み時間は、家庭からの連絡帳に対応し、問題が起こる度に、昼食を食べないで対応することも珍しくありません。その日のうちに解決するというのが、鉄則だからです。

長時間過密労働を早く解消して欲しいという職場の切実な願いを、政府は、1年単位の「変形労働時間制」という見せかけで、時間外労働時間を減らすというやり方を決めました。8時間労働から9時間労働にすることによって、時間外の仕事を勤務時間の中に入れてしまおうということです。1日8時間の労働という基本的な原則が、なし崩しにされてしまっています。6時近くまで学校に拘束されることになります。いくら夏休みの勤務時間が短くなるとは言っても、日々の疲れが、どんどん蓄積されてしまっています。仕事を減らしたり、教職員定数を増やすことには全く手をつけずに、時間外労働を勤務時間の中に取り入れてしまおうという、とんでもないことを考えたのです。これでは、教職を目指す若者をより一層遠ざけてしまいます。今後、自治体毎に、そのやり方を取り入れるか判断されますので、世田谷区で、取り入れないように、運動を強めたいと思っています。

子どもたちの瞳が輝くように、魅力的な仕事となるように、現場の声を集め、民主的な学校作りに取り組んでいきたいと思えます。
(都教組世田谷支部委員長)

【当面の行動予定】

12月4日 区民集会

12月6～9日 第5回区内全駅一斉宣伝行動

2月14日 戦争させない！九条こわすな！世田谷連絡会学習会（内容未定）

3月14日 同集会&パレード

【秋の句】

山形 三郎

気候の良い季節ではあるが、直ぐに冬が迫っている。冬には死すものも多く、それを待つ厳しく、寂しい時で、「もの悲しさ」を感じやすい季節でもある。

「秋深き隣は何をする人ぞ」 「この道や行くひとなしに秋の暮れ」 芭蕉
「月天心貧しき町を通りけり」 蕪村
「秋風やむしりたがりし赤い花」 一茶
「栗むきぬ子亡く遠し夫とふたり」 貞

「透明にしょう油の染みて煮大根」 時子
「涌水の水底明るし散紅葉」 時子
「金木犀香り届けよ逝きし友」 和夫

【編集後記】

- ☆ 相次ぐ台風による全国的な被害に加えて、兵器の爆買いや自衛隊の中東派遣、消費税増税という逆累進税制、日米 FTP や TPP 締結による日本農業の危機、沖縄をはじめ全国で民意を無視しての米軍への便宜供与、慰安婦や徴用工といった日韓問題では、頑なな姿勢を取り続ける安倍長期政権。膿がたまりすぎて、もう洗い流すしかないところに来ています。きれいな「水」が早く飲めるようにがんばりましょう。
- ☆ 中でも腹の立つこと。公費を使った「桜を見る会」が、安倍首相をはじめとする政権与党の後援会の接待に使われていたこと。国民には確定申告のために領収書 1 枚 1 枚を求めながら、予算をはるかに上回る「桜」への招待者名簿は速やかに廃棄して「問題ない」とうそぶく官邸。挙証責任は一体誰にあるのでしょうか。
- ☆ 世田谷・九条の会に登録されている方はおよそ 500 人で、年間の会運営には 50~60 万円かかります。しかし現状では事務所を維持していくのがおぼつかない状況です。お一人お一人の年一口千円の寄金が頼りです。家計が楽でないことを承知の上で心苦しいのですが、振込用紙を同封しますのでご協力よろしく願いいたします。

